様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６４６３１８６

研究課題名（和文）患者の地域・コミュニティー（異文化）的背景に基づく医療コミュニケーション教育

研究課題名（英文）Medical communication education based on community and intercultural background of patients

研究代表者
小川　哲次（Ogawa, Tetsuji）

広島大学・病院（歯）・名誉教授

研究者番号：５０１１２２０６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は，地域歯科医療に必要な模擬患者を活用した医療コミュニケーション教育のシステムを構築することにある．
まず，患者と歯科医療者間のコミュニケーションについて，異文化的視点でモデル化した.次いで，そのモデルを用いて多様な文化的背景をもつ患者・家族のシナリオを作成し，それを演ずる模擬患者を養成した.そして これらの教育資源を活用したシミュレーション教育システムの構築を行った.

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to construct an education system of the medical communication using simulated patients necessary for the community based dental care. First, we modeled communication between patients and dental staffs from a intercultural point of view. Then, using that model, we created scenarios of patients and families with diverse cultural backgrounds and train simulated patients to play them. And we also constructed a simulation education system using these educational resources.

研究分野：総合歯科医療学

キーワード：医療面接　異文化コミュニケーション　地域文化　地域歯科医療　ナラティブ　模擬患者シミュレーション　シナリオ

１．研究開始当初の背景

我が国の地域歯科医療は，超高齢化社会を迎える診療所から往診や在宅へという患者や家族生活空間にまでの広い範囲及んでいる．このような地域歯科医療を担う歯科医療者には，患者の歯科疾患の診断．治療．口腔保健管理能力の他に，生活者としての患者と家族の語りに代表されるナラティブ面に対応する能力が必要である．

医療における多様な価値観やニーズ・デマンドを有する患者・家族そして多（異）職種間の連携や協働には，それぞれのコミュニケーション方法や内容に影響を与える文化（思考や価値観，規範・行動様式）の違いを受け入れる異文化理解の視点が必要である．異文化コミュニケーションは，多様性や違いを前提としたコミュニケーションであり，共通の言語を話す同一国内での文化の異なる集団（地域，世代，性差・ジェンダー，職業など）にも適用される．文化とコミュニケーションそして価値感やアイデンティティとの関係について，池田（2006)は，文化が自己をつくり，その自己＝アイデンティティがコミュニケーションに影響を与え，他者とコミュニケーションをすることによって作られると述べ，石井ら（2003)は，文化の違いが社会と文化，対人関係，思考パターン，世界観などの価値観の違いに影響するとしている．さらに，岡本（1999）は，文化はコミュニケーションや価値観そしてアイデンティティと相互に関連し，それぞれの帰属する文化によってコミュニケーションスタイルや慣習が異なり，アイデンティティの発達も違ったものになると述べている（図１）．

しかし，我が国では，地域歯科医療に必須である地域的あるいは異文化的背景をもつコミュニケーションスタイル，多様な価値観やニーズを有する患者・家族に対する行動科学的対応についての卒前・卒後教育を行うまでには至っていない．

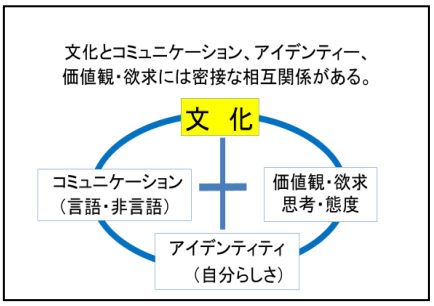


図１．文化とコミュニケーション，アイデンティティ，価値観との相互関係（岡本：中年からのアイデンティティ発達の心理学，初版第 2 刷，ナカニシヤ出版，1999．より改変引用）．

研究代表者らは，広島・岡山の模擬患者（SP）の協力を得て医療コミュニケーションの SP シミュレーション教育を行っている．また，周術期，認知症．脳梗塞後遺症後のリハビリテーション期，緩和ケア中のがん患者症例などについて，患者．家族の人生（家族を含めた）をシナリオに加味し，地域歯科医療の卒前・卒後教育に活用している．

２．研究の目的

本研究の目的は，我が国の地域歯科医療に必要な臨床行動科学並びに医療コミュニケーション教育に資するために，①患者と歯科医療者間のコミュニケーションを異文化的視点でモデル化し，多様な文化的背景を有する社会やコミュニティー（共同体）で生活する患者・家族のナラティブなシナリオの要件を開発すること，②教育資源としてのナラティブな語りとロールプレイのできる模擬患者（SP）を養成すること，そして③ ナラティブな語り（ロールプレイ）の SP を活用したシミュレーション教育システムの構築を行うことにある．

３．研究の方法

研究に際しては，研究目的の①～③をそれぞれ研究１～研究３として計画・実施した．

１）研究１．異文化視点での患者-歯科医療者間コミュニケーションのモデル化と多様

な文化的背景を有する患者・家族のナラティブな症例シナリオの開発：

（１）研究 1-1：異文化視点での患者-歯科医療者間コミュニケーションのモデル化：

広島県内で往診歯科診療や口腔ケアでの豊富な体験を有する歯科医師と歯科衛生士を対象にインタビュー調査を行い，医療現場で体験・経験した患者・家族のコミュニケーションの特徴（スタイル）やその変化と異文化的背景との関係などを中心に聴取した．インタビュー時の音声記録から作成したトランスクリプト（逐語録）を用いて 4 step cording 法（SCAT）により分析した．

（２）研究 1-2：多様な文化的背景を有する患者・家族のナラティブなシナリオの開発：

研究 1-1 のインタビュー調査の分析結果をもとに，ナラティブな患者や家族の病苦の物語や生活の物語りに求められるシナリオの要件やあり方を吟味し，患者・家族のナラティブなシナリオの開発・作成にあたった．

２）研究２：ナラティブな語りとロールプレイのできる SP の養成：

研究 1-1 の異文化視点での患者-歯科医療者間コミュニケーションモデル，研究 1-2 の患者・家族のナラティブなシナリオの開発要件をもとに，広島市と岡山市（研究分担者　吉田登志子）でナラティブな語りとロールプレイのできる SP の養成のために，セミナーを開催した．

３）研究３：ナラティブな語りとロールプレイのできる SP を活用したシミュレーション教育システムの構築：

ここでは，学習者が SP と直接ロールプレイを行う SP シミュレーション，学習間でのロールプレイやグループ討論（paper patient：画像・音声・動画象などの視覚媒体)によるという 2 種類の授業を実施し，その教育効果や症例シナリオと SP の語りのロールプレイ及び教育効果について検討した．

４．研究成果

１）研究１．異文化視点での患者-歯科医療者間コミュニケーションのモデル化と多様な文化的背景を有する患者・家族のナラティブな症例シナリオの開発：

（１）研究 1-1：異文化視点での患者-歯科医療者間コミュニケーションのモデル化：

SCAT のコーディングにより，患者や歯科医療者のそれぞれが所属する集団と文化的背景にかかわる概念が多数生成された．これらの概念を用いて，異文化的視点での患者と歯科医療者間のコミュニケーションプロセス（表１）とモデルを作成した（図２）．【話し手】は自身の所属する集団の文化をもとに，伝えたいこと（イメージ）を言葉や非言語メッセージに翻訳して【聞き手】に伝え，【聞き手】はそれを自身の所属する文化をもとに解釈（翻訳：イメージ化）する．このメッセージの翻訳での文化における価値の等価性にあてはめるという視点が重要であり，これがコミュニケーションのずれの要因となると考えられた．

表１．異文化的視点での
医療コミュニケーションプロセス

| 患者 | 歯科医療者 |
|---|---|
| 【話し手】<br>伝えたいこと(イメージ)を歯科医療者の文化（専門職）における*価値の等価性*にあてはまるメッセージ（表象＝明示的・非明示的）に翻訳しようとする． | 【聞き手】<br>患者のメッセージ（表象＝明示的・非明示的）を自身の文化（専門職）における*価値の等価性*にあてはめて解釈し，イメージ化する． |
| 【聞き手】<br>話し手である患者のメッセージ（表象＝明示的・非明示的）を自身の文化における*価値の等価性*にあてはめて解釈し，イメージ化する． | 【話し手】<br>伝えたいこと(イメージ)を患者の文化における*価値の等価性*にあてはまるメッセージ（表象＝明示的・非明示的）に翻訳しようとする． |

通常，わが国では患者・家族と歯科医療者との会話では，互いに語彙や発音が同じ（伝わる）と理解されている日本語の共通語（いわゆる標準語）が用いられることが多い．共通語が使われるのは，患者と歯科医療者の

双方で送り手のイメージが受け手のイメージとが一致するという大前提があることに他ならないが，患者の発話時における非言語メッセージや発話前後のコンテキスト（文脈）によっても，歯科医療者の解釈（翻訳）とイメージは影響を受ける．

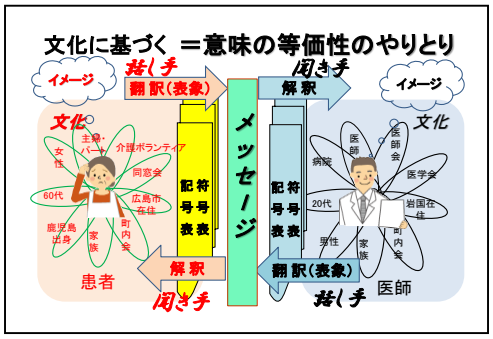


図 2. 異文化的視点でのコミュニケーションモデル

（2）研究 1-2： 多様な文化的背景を有する患者・家族のナラティブなシナリオの開発

研究 1-1 のインタビュー調査の分析結果から，ナラティブなロールプレイのできるシナリオには，患者の病苦についての医学的な情報（症状やその経過）のほかに，患者や家族の生活や人生にかかわる情報，そして価値観･アイデンティティ・思想・コミュニケーションなどと最も関連が深い文化についての情報が必要だということが分かってきた．しかも，SP が患者や家族の生活や人生をイメージできる（し易い）ように，時系列で書かれることが望ましいという結果を得た．また，患者や家族の生活や人生にかかわる情報については，実際のロールプレイを担当する SP がシナリオから患者や家族の人生をイメージできるかどうかが重要であるとの助言を SP 研究会代表より得た．従って，多様な文化的背景を有する患者・家族のナラティブなシナリオの作成にあたっては，教員（医療者）側は患者の医学的情報の詳細を時系列で書き，患者の年齢・職業，家族構成などを含めて患者・家族の生活や人生の情報を SP と協働して時系列で作り上げる必要があるとの結論にいたった．

これらの結果を用いて，認知症や脳梗塞後の療養・リハビリ期，がんの化学療法や緩和療法期で，連携口腔ケアや摂食嚥下指導．栄養サポートの必要な患者やその家族の地域文化（異文化）的背景（意味），時間軸，社会性を踏まえたナラティブな語りとロールプレイのための SP シナリオを作成した．

２）研究２：ナラティブな語りとロールプレイのできる SP の養成：

広島市では広島県内で活動する SP，岡山市では中国四国地区で活動する SP を対象にナラティブな語りとロールプレイのできる SP の養成を行った．

（１） ひろしま模擬患者セミナーの開催
（研究代表者：小川哲次）

表２は第１回から第５回までのセミナー参加者数を示しているが，全セミナーに参加した SP は数名であった．セミナーのテーマは，第１回：役作りとイメージ，第２回：心の動きとその反応，第３回シナリオのイメージを膨らませる，第４回：心が動く，反応するそしてフィードバック，第５回：SP の役作りとフィードバックとした．

表２．ひろしま模擬患者セミナー参加者数

| | | 第1回 | 第2回 | 第3回 | 第4回 | 第5回 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 参加者数（人） | ＳＰ経験 | 2015年10月10日（土）午後 | 2016年3月6日（土）午後 | 2016年6月7日（火）夜 | 2016年10月29日（土）午後 | 2017年3月11日（土）午後 |
| SP | 経験者 | 19 | 18 | 21 | 10 | 16 |
| | 初めて | 3 | 2 | 5 | 0 | 0 |
| | 小計 | 22 | 20 | 26 | 10 | 16 |
| 教員・職員 | 経験者 | 10 | 6 | 6 | 8 | 8 |
| | はじめて | 2 | 1 | 1 | 0 | 1 |
| | 小計 | 12 | 7 | 7 | 8 | 9 |
| 参加者総数 | | 34 | 27 | 33 | 18 | 25 |

本セミナーの目的から，自由記述の中でナラティブな語りとロールプレイのできる SP の養成から，役作り，イメージ膨らませる，心の動き，心の動きと反応などについての記述を抽出した（表３）．

表３．ひろしま模擬患者セミナー（第１回～第５回）の受講後アンケート（自由記述）結果（役作り，イメージ，心の動き，反応，イメージを膨らませるなどについての記述を中心に抜粋した．）

- 心の動きに気づくこと.
- 「心が動いた瞬間」を感じたこと.
- “患者の心の変化の”大切さに気づかせてもらった.
- 演じる上でその患者の背景が心のひっかかりの大切さを改めて感じた.
- “感じること”をもっと探求したい.
- 心の動きが顔だけでなく，指先に表れたことへの驚きは大きかった.
- 患者さん本人になること，本人としてどう感じているか　大切にしたい.
- 内容をよくばらず　心に焦点を当てて進められた.
- イメージをふくらませて役作りをするということ.
- 五感を使ってイメージする大切さを実感した.
- イメージを膨らませることがいかに大切かがわかった.
- 病気のことだけでなくその人の生き方からイメージしていくということがわかってよかった.
- シナリオしっかりよみこみ，役のすりあわせをし，役になりきって，自分の心の動きを感じることが大切だと思った.
- 役づくりというより，自分に役（状況）をかぶせるような感覚を味わった.
- しょせん自分から離れては成り立たないものだとあらためて感じた.

（２）岡山での養成セミナーの開催

（研究分担者：吉田登志子）

ナラティブな語りの演技ができる模擬患者の養成するために，平成 26 年から 28 年の３年間（１回/年）に中四国地方の模擬患者を対象とした養成セミナーを開催した．開催期日と参加者を表３に，テーマと内容を表４に示した.

１回目のセミナー後の感想では，参加者は役作りに対するイメージが個人でそれぞれ違い，だからこそ各 SP の役作りやフィードバックに個別性が生まれることが挙がっており，イメージを膨らませるということの難しさや大切さを実感していることが示唆された．また，他の県の SP との交流に対する肯定的な意見が挙がっていた.

２回目並びに３回目のセミナー後のアンケート調査には理解度の程度，内容がニーズにあっているか，教材は適切か，内容が役立つか，講師のプレゼンテーションへの満足度，このセミナーを知り合いに薦めたいか，セミナー全体的に対する満足度の全ての質問に対して肯定的な回答が多かった．また，３回目のディスカッションでは，「どんな視点でイメージをするかが難しい」，「経験していないことを想像するのは難しい」，「役作りに１本筋を通すことが大切」，「シナリオの目標にあった患者を演じることが大切」，「ある特定の病気を持つ患者を演じる時はどのような症状が出るかを知っておくことが大切」などと役作りの難しさや役作りの重要なポイントを実感していることが示唆された.

表４．中国四国地区の SP 養成セミナー参加者数

| セミナー | 参加者 |
|---|---|
| 第１回<br>平成 26 年<br>11 月 22 日 | 岡山 11 名，広島 5 名，鳥取 1 名，島根 2 名，高知 3 名，徳島 2 名（計 24 名） |
| 第２回<br>平成 27 年<br>11 月 28 日 | 岡山6名，広島3名，鳥取2名，島根3名，高知3名，徳島7名,香川2名，教員4名，学生3名（計 33 名） |
| ３回<br>平成 28 年<br>11 月 12 日 | 岡山 11 名，広島 4 名，鳥取 2 名，島根 2 名，高知 5 名，徳島 2 名，香川 5 名，教員 4 名,学生 3 名(計 38 名) |

表５．セミナーのテーマと内容

| | テーマ | 内容 |
|---|---|---|
| 1回 | “役作り（イメージする）” | ロールプレイとグループディスカッションを交えながら役のイメージを深めた. |
| 2回 | “役作りとフィードバック” | レクチャー，ロールプレイおよびグループディスカッションを交えながら，役のイメージ作りとフィードバックの演習を行った. |
| 3回 | “痛みの表現と役作り” | SP が表現と役作りについてゲームやロールプレイおよびグループディスカッションを交えた演習を実施した. |

以上より，計 3 回のナラティブな語りのロールプレイ（演技）ができる SP の養成セミナーは，参加者の役作りに際しての困難な点や重要な点な気づきを促し，自身の役作りを振り返る有意義な機会となっていることが示された.

**３）研究３：**ナラティブな語りとロールプレイのできる SP を活用したシミュレーショ

ン教育システムの構築：

SP シミュレーション教育については，地域歯科医療学の授業（歯学科５年）で，初診医療面接とインフォームドコンセント場面のロールプレイとして実施した（図３）．

図３．授業での模擬患者（SP）と学生のロールプレイ場面（病室への往診）（画像の加工処理後）

また，歯学部コミュニケーション学の授業（歯学科２年生，口腔健康科学科２年生），地域歯科医療学の授業（歯学科３年，４年生）では，paper patient（症例シナリオ：印刷物，画像・動画提示）を利用して，学習者間のロールプレイとして実施した．

これら授業では,多様な価値観を有する患者の文化的背景やアイデンティティ・規範・コミュニケーションスタイルと関係性などの地域歯科医療における異文化的視点でのコミュニケーションについての学習効果が高かったことから，患者-歯科医療者間の関係性構築のためのコミュニケーション教育に有効であることがわかった．

４）参考文献


１．石井　敏，久米 昭元，遠山　淳編集：異文化コミュニケーションの理論．第２版，有斐閣ブックス，東京，2003.

2. 石井　敏，久米昭元編集：異文化コミュニケーション研究法．第３版，有斐閣ブックス，東京，2013.

3. 岡本裕子：中年からのアイデンティティ発達の心理学，初版第 2 刷，ナカニシヤ出版，1999.


５．主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３　件）

1. 小川 哲次：　地域における患者中心の総合歯科医療への期待．日総歯誌，9：3-7，2017.　査読有り．

2. Nagatani Y., Imafuku R., Takemoto T., Waki T., Obayashi T. and Ogawa T.：Dental hygienists' perceptions of professionalism are multidimensional and context-dependent: a qualitative study in Japan.　BMC Medical Education 17:267(10 ページ)，2017. 査読有り．

3. Oto T., Obayashi T., Taguchi N. and Ogawa T.：Study of factors related to the reflection abilities of dental Trainees. Eur J Dent Educ 21:13-16, 2017. 査読有り．

〔学会発表〕（計　２　件）

１．長谷 由紀子，　竹本 俊伸，　小川 哲次：歯科衛生士のプロフェッショナリズム―コミュニケーションの視点から―：日本ヘルスコミュニケーション学会第 8 回学術集会：2016 年 9 月 10 日,東京大学医学部教育研究棟（東京都）．

２．小川 哲次：異文化コミュニケーション的理解に基づく歯科医療面接―関係性構築と医学情報・背景の聴取の先に見えてくるのは？―：第 26 回日本口腔内科学会・第 29 回日本診断学会学術大会招待講演,2016 年 9 月 24 日，さん太ホール・山陽新聞本社ビル(岡山市).

６．研究組織

(1)研究代表者

小川 哲次　(Ogawa Tetsuji)

広島大学・病院（歯）・名誉教授

研究者番号：５０１１２２０６

(2)研究分担者

吉田 登志子（Yosida Toshiko）

岡山大学・医歯薬学総合研究科・助教

研究者番号：１０３０４３２０